

協議会活動—15周年から20周年まで

事務局長 小田中 徹也 (国立京都病院図書室)

近畿病院図書室協議会が1974年に創立されてから1989年までの15年間の当協議会活動については、当時の本誌上ですでに一度まとめている(後述)。そこで本稿では、その後の5年間の協議会活動について年代を追って要約的に紹介する。

1990年代に入ると、病院図書室が医療と図書館界の双方から少しずつ存在感を認識されはじめた。それは各科学会による臨床教育病院への所蔵資料量の規定、情報と業務のコンピュータ化による小図書室のパワーアップ、各地における病院図書室間の組織化、さらに医学図書館の病院図書室への積極的な協力姿勢などに見られた。

当協議会では、1990年春に15周年を記念して、会誌『病院図書室』第10巻「設立15周年記念号」を発行した。会の活動や各事業の詳細な軌跡をたどり、記録資料として役立てることも図った。また、ここでは会外の図書館員や病院管理者、新人図書館員も交える座談会記事を企画して病院図書室の問題点や可能性を考え、展望を模索した。

ところで、1981年以来、会員の所蔵する医学雑誌の総合目録を作成して文献の相互利用を進めてきたが、この年、国内および外国雑誌両編の同時改訂を企画した。その編集では、汎用コンピュータにすでに記録されている会員の所蔵データを追加、修正する方法で作業を進めることにした。また、記載法では個別誌名記入方式を採用することにし、さらに、

この改訂を機に資料の分担保存の事業化も検討されて、協力活動の飛躍が期待された。

同年9月には全国図書室研究会(日本病院会主催・当会共催)を京都市で開催した。テーマを「病院図書室の活性化」とし、特別講演には前川恒雄滋賀県立図書館長を招いた。相互貸借、資料整理、情報検索、出版状況の動向や図書館員の資質向上を考えると共に、シンポジウムでは新しい「利用者サービスの向上」を探った。

11月には、前年に引続き第2回名古屋研修会を開催し、図書館の役割について基本的な考え方を学び、事例報告とディスカッションで当地区の病院図書室の紹介と協力活動の可能性を考え、当協議会と東海地区の病院図書室が連携していくことになった。

1991年になると、図書館のネットワーク化とコンピュータ化の波は病院図書室においても著しいものがあり、病院図書室の内容や機能に大きな変化をもたらす徴候を示し始めた。

当協議会においても、ネットワークの地域的広がりが東海地区で活発になり、8月はじめには東海地区の7会員が名古屋で連絡会を開き、協力活動拡大の方法を検討した。これは11月に開催した第3回名古屋研修会が、当地区の会員が中心となる実行委員会形式をとったこととも併せ、東海地区の病院図書室がネットワークの必要性を痛感している顕れでもあった。

コンピュータは総合目録の編集処理にも利

用されていたが、個々の図書室においても情報検索や業務の中にパソコンを取り入れることが目立ち始めた。そうした情勢を反映して、会報18巻4号では「CD-ROM 導入に向けてのガイダンス」を特集して具体的、実用的にこれを紹介した。また、第63回研修会では「パソコンによる医学雑誌特集記事の管理」をテーマとして会員間での情報交換を行った。

また、FAX の普及も著しく、文献の相互貸借にも会員間で利用される機会が多くなってきた。そのため、会員間で料金の混乱が生じないように、「医学文献 FAX 基準料金表」を設定した。

1992年は会誌発行形態の変更、全国的研究会の企画運営そして会名称の検討と、事業活動や活動基盤に大きな意味を持つ年であった。

まず、会の設立以来、隔月に発行されていた「会報」は3月に通巻100号記念号をもって終刊とし、別に年刊で発行されていた会誌『病院図書室』に統合してこれを季刊で発行することにした。装いも新たな会誌『病院図書室』（12巻1-2号 May '92）は会内外から好評裡に迎えられ、『医学中央雑誌』（同刊行会）へは新たに、また『図書館雑誌』（日本図書館協会）では専門誌として収載されることになった。その後、1993年発行分からは日本科学技術情報センターの発行する『科学技術文献速報』や、JOIS、STN Internationalにも収録されることになった。

次に、日本病院会主催の全国図書室研究会が9月はじめ神戸市で開催され、従来と同様に当協議会が企画や運営に協力した。この時は、評論家の鶴見俊輔氏を招き「臨死の読書と回復期の読書」と題する特別講演を企画した。また、メインテーマを「資料の保存」として、保存の考え方、分担保存、著作権法について学んだ。さらに、シンポジウム「病院図書室における資料の保存と廃棄」では活発な質疑応答があり、この問題に対する関心の高さが窺われた。

ところで、当時の会員構成は近畿外からも

神奈川から福岡県まで16機関、全会員77機関の2割を占め、また病院の他に医療教育施設からも8機関が会員となっていた。そうした中で、近畿地区外の会員から会発足以来の名称「近畿病院図書室協議会」から「近畿」を外し、ネットワークの枠組拡大をとの要望がこの頃出されていた。これは組織活動の全体にも関連する重要な事柄であったため、改称について会員の意向を問うことにした。12月に会員へアンケートを実施した結果、改称については賛否ほぼ同数の回答であった。また、近畿地区内外の地域による傾向はなかった。そのため、早急な結論は出さず、協議会の基本的なあり方も含めさらに検討を重ねていくことにした。

その他、この年に「医学雑誌総合目録」改訂版の完成には至らなかったが、定例研修会や見学会の開催、年次統計調査などの継続事業は例年通り順調に実施されていた。

1993年は4月からの製薬業界の営業活動の自粛が病院図書室に大きな影響を及ぼした。会員の各図書室では特に文献の相互貸借が激増し、パソコンの普及などもあって、文献検索のためのCD-ROM版の“MEDLINE”や『医学中央雑誌』の導入も顕著となった。さらに、スライド作成のためのパソコンの新たな設置も見られるようになった。

そうした状況は、病院において医学情報活動を担う図書室の役割が改めて認識されたとも考えられたが、担当者の新たな配置や補充などには反映されず、業務量の急増だけが目立った。このことは担当者の協議会活動への事業協力にも大きな影響を及ぼし、年来の課題を解決するまでには至れず、また継続事業の遂行にも大きな負担をもたらした。

他方、当協議会に対する外部からの期待は大きく、その年、多くは文献入手を主な目的として新たに20機関が入会した。地域的には特に兵庫県と東海地区からの入会が目立ち、範囲は青森県から鹿児島県までの広がりを示した。したがって、会員構成も総会員数96機

関のうち近畿地区外の会員は約3分の1近い29機関を占めるまでになった。

文献の相互利用と新入会員の急増に対し、当協議会では各事業の中にこれに対応する企画をたてた。勉強会や各研修会のテーマやプログラム、また、会誌でも「相互利用」を特集記事として会員の啓蒙に努めた。さらに、現行雑誌所在目録の作成や、日本医学図書館協会に加盟する全国の医学図書館へは「FAXによる文献申込み」についてのアンケート調査を実施した。この集計結果は会誌上で各会員に紹介し、文献入手の業務に役立てた。

前年からの懸案となっていた会の名称変更については十分な取組みができなかった。この年は特に、会内外の状況が流動的でもあり、会員の病院管理者も含めて考えていくべき課題となった。また、医学雑誌の総合目録の改定作業は編集委員会を中心に漸次進められていたが、幾つかの要因も重なり残念ながら発行には至らなかった。しかし、現行所在版を発行したことによって、会員は新しい所蔵状況を一応把握し相互貸借のツールとすることができた。

今年、1994年は日本医学図書館協会が5月の総会において会則を全面的に改正し、入会基準を撤廃した。これまでの大学を中心とする医学図書館の団体が、組織の拡大を計り病院図書室へも広く門戸を開いたことになる。また、「維持会員」として個人会員制度も新たに設けられた。規模や目的・機能の異なる図書館で構成される団体組織が、どのように活動し運営されていくのか興味深い。いずれにしても従来以上に病院図書室の強力な支えであろうと期待される。

社会全般のリストラの波が医療界にも浸透し、前年来の業務量の激増と人員への圧迫が進行する中で、当協議会は創立20周年を迎えた。現在、会員数も103機関の医療施設を数え、病院における医学情報のネットワークとして大きな期待がかけられていると思う。こうした変化を認識し、これからの病院図書室

のあり方を探る機会として創立20周年の記念事業を企画した。

春から準備をすすめた「創立20周年記念フォーラム」は秋晴れの11月9日、京都市国際交流会館で開催され、会内外から90名を越す参加者を得た。「変化の中の病院図書室」をテーマとするシンポジウムでは、今後さらに大きな課題になるであろう5つの項目について、それぞれ意欲的に取組まれている講師を招いた。それは、臨床教育的側面からの図書室の役割、利用経験からみたアメリカの病院図書室紹介、病院における図書館員の専門性、日本医学図書館協会と病院図書室、インターネット・コンピューティング、である。また、特別記念講演では高齢化社会を迎える日本の医療を知るために、柏木哲夫大阪大学教授から「老いを考え死を学ぶ」と題する感銘深い講演があった。さらに、懇親会では講師や来賓の方々も交え、予想以上の参加者のもと創立20周年を祝った。

この5年間の当協議会の活動の中で、総合目録の改訂と会の名称変更については未解決の、大きな課題として残されている。特に総合目録については早急に結論を出さなければならぬ。また、病院図書室を取り巻くネットワーク形成の変動も定まったと思われ、当協議会の新しい方向性を定める時期であろう。

個々の病院図書室においてもこの数年、大きな変化があった。中でも資料と情報を扱う特質からもコンピュータ化の著しい普及はその最たるものである。この傾向は今後さらに予想を超える速さで進むと思われる。図書館のネットワークも早晚、コンピュータ・ネットワーク抜きには考えられないであろう。

最後に、1990年からこの5年間、当協議会の会長を引き受けていただいた淀川キリスト教病院院長の白方誠彌先生には暖かいご指導、ご支援をいただいた。また、各幹事や会員各位をはじめ、会外の多数の関係者からも多大なご協力とさまざまなご支援をいただいた。ここに改めて感謝いたします。